

## はじめに

本書が提案したいのは、わたしたちの社会の教育を「ゆるめる」ことだ。

いま日本の教育界は、かつてないほどピンと張りつめている。背景には、この国にいろいろな意味で余裕がないということがある。特に、グローバル市場における熾烈な競争しれつのなかで、経済的に低迷を続けているということは大きい。地方はますます衰退していく。政治のさまざま試みも、状況を打開してはくれなそうだ。企業にとっても、人々にとっても、さきのみえない不安な時代である。そしてそんな不安な時代を生きる子どもたちに、「生きる力」をつけさせたいという「親心」は、わからないではない。また企業の経営者が、少しでも優秀な人材を取り込みたいと考えるのは、必然ではあるだろう。地域の衰退や政治の空洞化を食い止められる人間が現れてくれれば、わたしたちの不安な気持ちも、いくぶんなりとも和らぐというものである。

しかし、まがりなりにも教育学を専門とする者として、ここは言わせてほしい。現代日本社会の問題を、なんでもかんでも教育で解決しようというのはいただけない。

確かに教育は、人間を育てることを通じて、人々の人生や社会の未来に対して、一定の貢献を為す<sup>な</sup>ことができる。しかしわたしに言わせれば、そのような教育の役立ちの度合いは、決して大きいものではない。教育には不確実性がつきものである。これはもう、教員養成のテキストでも論じられる「教育学の基本のキ」だ。教えたからといって、その分だけ子どもが育つというわけではないし、教えたつもりがないのに、子どもの方が勝手に学んでいるということもある。もちろん教師も教育学者も、その確率論的な育ちをどうにかして望ましい方向に向ける努力はするが、なんとと言っても育つのは子どもなのだから、「最小限のコストで最大限のメリットを達成しなさい」「必要な人材をきっちりきっかり、耳をそろえて社会に納品しなさい」などという注文を、そうそう請け負うことはできない。それにそもそも教育は、経済のためだけのものでも、共同体の維持のためだけのものでも、家族のためだけのものでもない。市場も、国家も、地域共同体も、そして家族も、もつと役に立つ教育をしろ、意味のある教育をしろと言うけれど、それぞれ注文はバラバラ

なのである。もちろん教育は、それぞれの要求に（確率論的に）少しずつ貢献はする。しかしそれをもっと推し進めて、どれかの目的のためだけに合理化・効率化しようとするれば、教育はずいぶんと歪いびつなものになる。まして、みんながみんな教育からそれぞれの利益を引き出そうと躍起になっても、そんな過剰な期待に引き裂かれた教育がうまく機能するとは思えない。結果、みんな当てが外れて、みんな不幸になる。

教育とは十徳ナイフのようなものだ、と言えば、そのニュアンスは伝わるだろうか。それはさまざまな用途で、いろいろな事柄に貢献できる。しかしとはいえ、料理を作りたいならば包丁を使うべきだし、稲を刈るならカマや稲刈り機しに如くはないし、家を建てたいならのこぎりや重機を用意した方が、理に適用というものだ。それらに無理やり十徳ナイフを使うのはおかしいし、十徳ナイフ自体も壊れてしまう。そんな不合理な注文に応えられないとして、責められるべきはナイフ（教育）だろうか、それを無理やり使おうとする人だろうか（わたしは後者だと思っている）。

このように書く読者は、「この本の著者は、教育学者のくせに、人々によりよい教育を保障することについて、ずいぶん後ろ向きなんだな」と意外に思うかもしれない。しか

し停滞の続くこの社会で、誰もが不安に押しつぶされ、ちょうどその分だけ教育なるものに過剰な期待や希望を託そうとしている。その結果、教育、なかでも学校教育が、改革に次ぐ改革の嵐に呑まれ、余裕をなくし、ピンと張りつめ、張り裂けそうになっている。そんな時、教育に多くをもとめすぎると警鐘を鳴らすことは、結果的に、この社会と教育を持続させるためにいま一番必要なことなのではないだろうか。

だから本書は市場や国家、共同体や家族、その他もろもろ、教育に対して過剰な期待を寄せる教育の外部——この外部の総体を、本書では社会と呼んでいる——に対して、一定のNOを突きつける。だから本書は、そんな「社会の役に立て」という声に、少なくとも一定の反抗を企図する教育学という意味で、「反社会的な教育学」のススメとなっている。教育には、できることとできないことがある。だからわたしたちは、教育に望み得ること／望むべきことを真剣に吟味しなければならぬ。ローマ帝政期のストア派の哲学者エピクテトスは、とても趣深い人生の秘訣を説いた。曰く、「わたしたちの力のうちにあつて自由になるもの」と「そとにあつて自由にならないもの」を分けよ、と（エピクテトス『提要』）。わたしはこの精神を、教育についての期待の仕方、教育なるものとわたしたち

のつきあい方にも援用してみたいと思う。すなわち、教育がその力を発揮して貢献できそうなのは最大限に追求し、そうでないものは適切に諦めてみる、という具合に。

結論を先取りするなら、わたしは、教育が可能にすることのなかで、かつ期待すべきなのは、「子どもを世界と出会わせる」ということだと思っている。逆にあまり期待すべきでないとなつたのが考えるのは、教育を通じて子どもの能力を強化し、そのことによつてさまざまな社会問題を解決するということが一般である。身も蓋もない言い方で少々恐縮だが、社会問題の解決は、社会全体で行うべきだ。グローバルイノベーションを勝ち抜きたいのはわかるが、なぜ私企業が自分の会社の職能開発を学校にやれと迫るのか。子どもの愛国心が足りないかと嘆く前に、子どもに愛されるに足る国をつくつてはどうか。貧困・格差問題の解決は焦眉だが、それには再分配のシステムを工夫する方が先だろう。

(わたしに言わせればお門違いにも) みんなが教育に過剰に期待し、そして勝手に幻滅して呪詛<sup>じゆそ</sup>している。みんな学校を叩<sup>たた</sup>いては、(Twitterでよくある揶揄<sup>やゆ</sup>表現で言えば)「ぼくがかんがえたさいきょうのきょういুকいかかく(要するに単なる思いつき)」を、自信たっぷり訳知り顔で述べ立てる。もういい加減やめてはいかかか。十徳ナイフで家を建てようとして

も不可能だし、あなたも無駄にイライラするだけではないか。国家や社会の問題は、国家や社会で解決しよう。

少し揶揄が過ぎただろうか。お気に障ったのなら申し訳ない。

しかしわたしとしては、原理的に解決不可能な種類・規模の社会問題を解決する役割を過剰に期待された学校教育がゆがみ、疲弊し、息も絶え絶えになっている現状を、看過することはできない。この現状を変えるためには、まずは教育について過剰に期待し、ちょうどその分だけ学校を呪詛し続けている日本社会の神経症的なあり様を、つまりはわたしたち自身の自画像を——なぜそのような病に陥ってしまうのか、という病理学的な観点も含めて——描き出すことが必要だろう。そしてその上でわたしたちは教育、とりわけ学校教育に対する適切な期待の仕方を学ばなければならない。

これが本書の中心的なメッセージであり、課題なのである。